

ルーベンス展 ―バロックの誕生

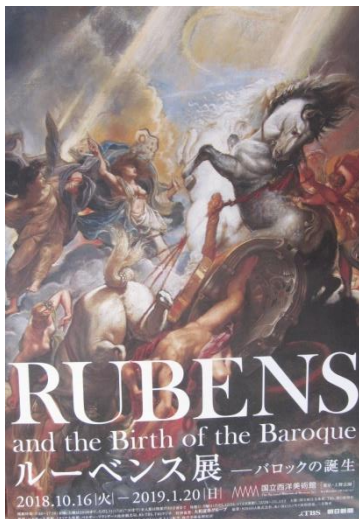
国立西洋美術館（東京・上野公園） 2018.10.16～2019.01.20

「ペーテル・パウル・ルーベンス」（1577～1640）は、スペイン領ネーデルランド（現在のオランダ）生れの17世紀を代表する画家で、豊かな色彩や動き溢れる構図によって、当時のヨーロッパを席卷した“バロック美術の巨匠”である。

本展は、ルーベンスとバロックの影響関係を探る企画で、とりわけ「ルーベンス」と「イタリア」とのかかわりに注目されるのは、若年時にイタリアで過ごし、この地の古代美術やルネサンスの美術を学び続け、当地に「バロック美術」が花開くきっかけとなったためである。

展示はルーベンスの作品を、古代彫刻や16世紀のイタリアの芸術家の作品、イタリア・バロックの芸術家たちの作品とともに展示し、画伯がイタリアから何を学んだかとイタリア・バロック美術との関係を明らかにするものである。

《バエトーンの墜落》 1604年 油彩/カンヴァス



作品名のごとく、ギリシャ神話の太陽神「アポロ」の息子「バエトーン」が暴走した馬車から振り落とされる瞬間が力強く、さらに暴走を止めるため放った「雷」が光輝いている光景が克明に描かれている。

画伯は「ゼウス」が投げた「雷」を描くことにより、暗さを維持させて「バエトーン」と「馬」の顔を分かりやすくし、光のコントラストをうまく調節している。

また、人物も同じように暗い部分と明るい部分を分離させて、表情を目立たせた構図として描かれている。

《クララ・セレーナ・ルーベンスの肖像》 1615年頃 油彩/板で裏打ちカンヴァス



この愛らしい少女像は、目じりが上がったパッチリした目と額の生え際の形から、5歳頃の長女「クララ・セレーナ」をモデルにして描いた作品であるとされている。

ヨーロッパ絵画史上“最も魅力的な子どもの肖像画”とされている絵画は、愛娘の赤みのある頬は生き生きとして、全く物怖じすることなく、真つすぐこちらを見つめるたたずまいは、子どもならではの幼さや可愛らしさがあつて、しかも強い眼差しがとても印象的で、少女の幼くして利発な気性が感じられる作品とされている。